英文解釈 L01 第 22 講 一文全体の構造を組み立てて訳す

学習目標

- 複数の句・節を含む一文について、主節の主語と述語を中心に全体構造を組み立てることができる。
- 名詞句・準動詞句・関係節・名詞節・副詞節の外側の働きと内部構造を区別し、修飾や接続の関係を根拠付きで説明できる。
- 主体・時点・否定・比較・条件・確度を変えず、英文全体を自然な日本語に訳すことができる。

一文全体を読むための考え方

長い英文でも、中心となる主張を見失わない

英文が長くなると、知っている文法事項ばかりなのに、最後まで読んでも何を述べているのか分からなくなることがある。原因の一つは、単語や句・節を順番に訳すことに集中し、主節の主語と述語のつながりを見失ってしまうことだ。

関係節の内部に主語と動詞があり、別の場所に不定詞があり、さらに副詞節が加わると、一文の中に複数の小さな構造が現れる。しかし、それぞれが同じ立場で文全体の中心を作っているわけではない。

解説

英文の中心を決めるのは、主節の骨格である。

主節は、その文で中心となる内容を述べる部分である。関係節は名詞を説明し、名詞節は主語や目的語などの位置に入り、副詞節は時間・理由・条件などを加える。

大切なのは、句や節の内部を細かく読む前に、そのまとまりが主節のどこにつながるのかを確認することだ。

例えば、主節の主語の途中に関係節が入っていたら、まず関係節を一まとまりとして捉える。その後ろにある主節の述語を探して、主語と結び付ける。関係節の内部には別の主語と述語があるが、それらを主節の述語と取り違えない。主節の骨格をつかんでから、関係節の内部へ戻って内容を確認する。

こうすれば、長い主語や目的語を含む英文でも、どの情報がどこに属するのか整理できる。

©ミライコーチング

外側の骨格と内側の構造を分ける

構造を二つの層で捉える

一文全体の構造を組み立てるときは、次の二つの層を区別する。

- **外側の構造：** 主節の S（主語）・V（述語）を中心に、O（目的語）・C（補語）・M（修飾語句）などがどこへ入るかを捉える。
- **内側の構造：** 外側に組み込まれた句・節の中で、誰が何をするのか、何が何を修飾するのかを捉える。

S・V・O・C・M は文中での働きを表すものであり、単語の品詞をそのまま示す記号ではない。V は助動詞を含む述語全体の範囲を下線で示す。M は修飾成分を表すが、必ず省略できるという意味ではない。

解説

大きな句・節の働きを確認するときは、次の囲み方を使う。

- 〈　〉: 名詞として働くまとまり。名詞節や名詞用法の不定詞句など。
- 〔　〕: 形容詞として働くまとまり。名詞を修飾する関係節・分詞句など。
- (　): 副詞として働くまとまり。時間・理由・条件を表す節や副詞句など。

この囲みは、句・節が**文の中でどのような役割を担うか**を示している。単に to 不定詞だから〈〉、-ing 形だから〔〕と決めるものではない。

また、句・節の内部に別のまとまりが入る場合は、外側と内側の両方を捉える必要がある。例えば、目的語となる名詞節の内部に、名詞を修飾する分詞句が入ることもある。

一方、述語全体や目的語と補語の関係は、無理に三種類の囲みに当てはめず、S・V・O・C などの働きとして正確に示す。

骨格をつかむことと、情報を省くことは違う

主節から出発し、主節へ戻る

一文全体を読むときは、次の順序を意識する。

1. **主節をつかむ。** 主節の S と V を結び、中心となる出来事や判断を確定する。
2. **内部を読む。** 句・節の範囲と外側での働きを確かめ、その内部の主語・述語・修飾先を読む。
3. **主節へ戻す。** 読み取った情報を主節に組み込み、時間・理由・条件・否定などの関係を保って全文を訳す。

この三つは、一文を短く切り捨てるための手順ではない。

解説

特に重要なのは、**骨格を確認するために一時的に取り除いた情報も、最終的な訳では元の位置関係に戻す**という点だ。

関係節をいったん脇に置くと、主節の主語と述語が見つけやすくなる。しかし、関係節が限定している名詞の範囲まで消してよいわけではない。

同様に、副詞節を脇に置いて主節を確認できても、最終訳から「もし」「〜だが」「〜したあと」などの関係を落とせば、英文とは違う内容になってしまう。

©ミライコーチング

さらに、主節の動詞に否定があるときは、何が否定されているのかを確かめる必要がある。名詞節の内部にある内容まで、機械的に否定文へ変えてはいけない。

英文全体を正しく訳すためには、構造を整理する作業と、意味を保持する作業の両方が必要なのである。

例題

例題 1　主節へ戻りながら構造を統合する

1

英文

After they visited the town museum, the students who joined the science club last month decided to make a simple guide for younger children.

語注： guide「案内書、ガイド」

a（構造） 主節の主語の範囲と述語を示し、After で始まる節、who で始まる節、to make で始まる句の範囲をそれぞれ示せ。

b（関係） to make で始まる不定詞句が、主節の decided とどのような関係にあるか、動詞の意味を根拠に説明せよ。

c（全訳） 英文全体を、時間関係と修飾関係を保って自然な日本語に訳せ。

解説

解答・解説

a（構造）

主節を中心に、次のように整理できる。

- 主節 S：the students 〔who joined the science club last month〕
- 主節 V：decided
- 主節 O に当たる内容：〈to make a simple guide for younger children〉
- 主節に時間を加える M：(After they visited the town museum)

指定されたまとまりの範囲は、次のとおりである。

- After で始まる副詞節：After they visited the town museum
- who で始まる関係節：who joined the science club last month
- to make で始まる不定詞句：to make a simple guide for younger children

最初に注目するのは、主節の S である the students と、V である decided のつながりだ。the students の直後には who joined the science club last month がある。この関係節の内部では who が主語、joined が述語だが、joined は主節の述語ではない。関係節を一まとまりとして扱うことで、主節の骨格が「その生徒たちは決めた」であると分かる。

b（関係）

to make a simple guide for younger children は、decided の内容を表す名詞用法の不定詞句として読む。decide は「決める」という動詞であり、この文では後ろの to 不定詞が「何をすることに決めたのか」を示している。

したがって、不定詞句を「案内書を作るために」と目的を表す副詞句として処理するのではなく、「案内書を作ることを決めた」と主節へ組み込む。

c（全訳）

直訳： 彼らが町の博物館を訪れたあと、先月科学クラブに入った生徒たちは、年下の子どもたちのための簡単な案内書を作ることを決めた。

満点の訳： 町の博物館を見学したあと、先月科学クラブに入った生徒たちは、年下の子どもたち向けに簡単な案内書を作ることにした。

読みのポイント

After 節の内部には they visited the town museum という主語・述語の組がある。ここでの they は文中の the students を指すと読むのが自然であり、博物館を訪れたあとに生徒たちが案内書の作成を決めたという時間関係になる。

また、who joined the science club last month は students を限定している。先月クラブに入ったという情報を、案内書を作る相手である younger children へ結び付けてはいけない。

最終訳では、主節の「生徒たちは決めた」に、関係節による生徒の限定、不定詞句による決定内容、After 節による時間関係をすべて戻す。このように、**一度主節を確定し、各まとまりの内部を読んでから外側へ戻る**ことで、情報を落とさず訳を組み立てられる。

(After they visited 〈the town museum〉),
M

〈the students 〔who joined 〈the science club〉 (last month)〕〉 decided
S V

〈to make 〈a simple guide 〔for 〈younger children〉〕〉〉.
O

M “After they visited the town museum” / 主節 M / After 節。主節全体に時間を加える。
S “the students who joined the science club last month” / 主節 S / who 節を含む主節の主語。
V “decided” / 主節 V / 主節の述語。
O “to make a simple guide for younger children” / 主節 O / decided の内容。to 不定詞句全体。

(After they visited 〈the town museum〉), 〈the students 〔who joined
S V O S V

〈the science club〉 (last month)〕〉 decided 〈to make
O M V

〈a simple guide 〔for 〈younger children〉〕〉〉.
O

S “they” / After 節 S / After 節内部の主語。本文では students を指すのが自然。
V “visited” / After 節 V / After 節内部の述語。
O “the town museum” / After 節 O / visited の目的語。
S “who” / 関係節 S / students を受ける関係代名詞。
V “joined” / 関係節 V / 関係節内部の述語。
O “the science club” / 関係節 O / joined の目的語。
M “last month” / 関係節 M / joined の時を表す。
V “to make” / 不定詞 V / 準動詞の V。主節の定形 V ではない。
O “a simple guide for younger children” / 不定詞 O / make の目的語。for younger children は guide の用途・対象を表す形容詞句として含む。

例題 2　否定と確度を変えずに統合する

2

英文

Although the reading program may help many students, the teachers cannot promise that everyone will understand difficult stories after only a few weeks.

語注： reading program「読解学習プログラム」、promise「約束する、保証する」

a（構造） 主節の主語と述語を示し、Although で始まる節と that で始まる節の範囲をそれぞれ示せ。

b（関係） cannot promise の否定が何にかかっているか、that 節との関係を根拠に説明せよ。

c（全訳） 英文全体を、否定の範囲と助動詞の確度を保って自然な日本語に訳せ。

解説

解答・解説

a（構造）

この文の外側の構造は、次のようになる。

- 主節 S：the teachers
- 主節 V：cannot promise
- 主節 O：〈that everyone will understand difficult stories after only a few weeks〉
- 主節に譲歩の意味を加える M：(Although the reading program may help many students)

Although で始まる副詞節は、Although the reading program may help many students までである。内部では the reading program が S、may help が助動詞を含む V、many students が O となる。

that で始まる名詞節は、that everyone will understand difficult stories after only a few weeks までであり、主節の promise の内容を表す。その内部では everyone が S、will understand が V、difficult stories が O となる。(after only a few weeks)は、that 節内部の understand について時間を示す副詞句である。

このように、Although 節と that 節は、どちらも主節の外側にある独立した主張ではない。前者は主節に譲歩の関係を加え、後者は主節の動詞の内容を担う。

b（関係）

cannot は、主節の promise を否定している。つまり、教師たちが「全員が理解することを保証できない」という意味であり、「全員が理解しないと教師たちが保証している」という意味ではない。

that 節は promise の内容であって、that 節内部の will understand が直接否定されているわけではない。したがって、この英文から全員が理解できないと断定することはできない。

c（全訳）　直訳： 読解学習プログラムは多くの生徒を助けるかもしれないが、教師たちは、わずか数週間後には全員が難しい物語を理解するだろうということを約束することはできない。

満点の訳： 読解学習プログラムは多くの生徒の役に立つかもしれないが、わずか数週間後に全員が難しい物語を理解できるとは、教師たちは保証できない。

読みのポイント　Although 節の may help は「役に立つかもしれない」という可能性を表している。「役に立つ」と確定した事実に変えないことが重要だ。

一方、主節の cannot promise は保証できないという意味であり、that 節の内容が必ず実現しないという断定ではない。

日本語を自然にするときは、that 節を先に訳してから「保証できない」を置いてもよい。ただし、否定されているのが保証する行為であることは変えない。

英文の語順を整えることと、意味の強さを変えることは別である。主節と従属部分の関係を確定できれば、日本語の語順を入れ替えても正確な訳を作れる。

(Although 〈the reading program〉 may help 〈many students〉), 〈the teachers〉
M　S

cannot promise
V

〈that everyone will understand 〈difficult stories〉 (after 〈only a few weeks〉)〉.
O

M “Although the reading program may help many students” / 主節 M・譲歩 / Although 節。may help は可能性を表し、確定した事実ではない。
S “the teachers” / 主節 S / 保証できない主体である教師たち。
V “cannot promise” / 主節 V・否定 / 保証できないという述語全体。that 節の内容が実現しないと断定するものではない。
O “that everyone will understand difficult stories after only a few weeks” / 主節 O・内容節 / promise の内容を表す that 名詞節。内部の will understand は直接否定されていない。

(Although 〈the reading program〉 may help 〈many students〉), 〈the teachers〉
S　V　O

cannot promise 〈that everyone will understand 〈difficult stories〉
S　V　O

(after 〈only a few weeks〉)〉.
M

S “the reading program” / Although 節 S / 役に立つ可能性がある主体。読解学習プログラム。
V “may help” / Although 節 V / may を含む述語全体。役に立つかもしれないという可能性。
O “many students” / Although 節 O / help の対象である多くの生徒。
S “everyone” / that 節 S / that 名詞節内部の主語。全員を表す。
V “will understand” / that 節 V / will を含む述語全体。主節の cannot によって直接否定されていない。
O “difficult stories” / that 節 O / understand の対象である難しい物語。
M “after only a few weeks” / that 節 M・時間 / understand の時間を表す。only は数週間という短期間を限定する。

演習問題

これまでに学習した句・節の読み方を組み合わせて、次の英文を解釈せよ。

各問では、主節の骨格を確定し、指定されたまとまりの範囲を確認したうえで、指定された一つの関係を根拠付きで説明すること。最後に英文全体を自然な日本語に訳せ。

句と節を統合する

1

英文

The teacher who organized the outdoor lesson explained that the marks on the old map showed safe paths for students walking through the forest.

語注： outdoor「屋外の」、organize「計画・準備する」、mark「印、記号」、path「道、通り道」

a（構造） 主節の主語の範囲と述語を示し、who で始まる節、that で始まる節、walking で始まる句の範囲をそれぞれ示せ。

b（関係） walking through the forest がどの名詞を修飾しているか、句の位置と意味を根拠に説明せよ。

c（全訳） 英文全体を、主節と内部の節・句の関係を保って自然な日本語に訳せ。

2

英文

After the evening practice ended, the players carrying heavy bags waited outside the school gym because the last bus had already left the nearby stop.

語注： practice「練習」、gym「体育館」、nearby「近くの」、stop「停留所」

a（構造） 主節の主語の範囲と述語を示し、After で始まる節、carrying で始まる句、because で始まる節の範囲をそれぞれ示せ。

b（関係） because で始まる節が主節とどのような意味関係にあるか、接続詞と節の内容を根拠に説明せよ。

c（全訳） 英文全体を、動作の主体と時間・理由の関係を保って自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

意味条件を保って統合する

3

英文

Although the new study room is much larger than the old one, it still does not have enough desks for every student in the evening class.

語注： study room「学習室、自習室」、desk「机」

a（構造） 主節の主語と述語を示し、Although で始まる節の範囲と、much larger than the old one の範囲を示せ。

b（関係） does not have enough desks for every student の否定が、どのような数量・充足の関係を表しているか、enough と every student を根拠に説明せよ。

c（全訳） 英文全体を、比較の程度と否定の範囲を変えずに自然な日本語に訳せ。

4

場面： この町では現在、週末の無料音楽レッスンは行われていない。現在の状況を踏まえて読め。

英文

If the town offered free music lessons on weekends, children who cannot afford private classes would have a chance to learn an instrument with their friends.

語注： afford「費用を負担する余裕がある」、private class「民間のレッスン」、instrument「楽器」

a（構造） 主節の主語の範囲と述語を示し、If で始まる節、who で始まる節、to learn で始まる句の範囲をそれぞれ示せ。

b（関係） If 節の offered と主節の would have が、どのような仮定の関係を表しているか、動詞の形を根拠に説明せよ。

c（全訳） 英文全体を、仮定の意味と修飾関係を保って自然な日本語に訳せ。

©ミライコーチング

演習問題の解答・解説

1

英文

The teacher who organized the outdoor lesson explained that the marks on the old map showed safe paths for students walking through the forest.

a（構造）

主節の骨格は次のとおりである。

- 主節 S：The teacher 〔who organized the outdoor lesson〕
- 主節 V：explained
- 主節 O：〈that the marks on the old map showed safe paths for students 〔walking through the forest〕〉

指定されたまとまりは、次のように区切る。

- who で始まる関係節：who organized the outdoor lesson
- that で始まる名詞節：that the marks on the old map showed safe paths for students walking through the forest
- walking で始まる分詞句：walking through the forest

主節は、The teacher explained という骨格を持つ。who で始まる関係節は teacher を限定し、どの教師なのかを説明している。

explained のあとに続く that 節は、説明した内容全体を表す名詞節であり、主節の O となる。

that 節の内部では、the marks on the old map が S、showed が V、safe paths for students walking through the forest が O である。さらに、この目的語の内部には walking through the forest という分詞句がある。つまり、主節の目的語となる名詞節の中に、名詞を修飾する別のまとまりが組み込まれている。

b（関係）

walking through the forest は students を修飾している。students walking through the forest で「森を歩いている生徒たち」というまとまりを作っており、歩く動作を行うのは students である。

walking を主節の述語として扱ったり、safe paths が歩くと解釈したりしない。分詞句がどの名詞の状態・動作を説明するのかを、語の位置と意味の両方から判断する。

c（全訳）

直訳： 屋外授業を計画した教師は、古い地図の上の印が、森を歩いている生徒たちのための安全な道を示していたと説明した。

満点の訳： 屋外授業を計画した先生は、古い地図の印が、森を歩く生徒たちにとって安全な道を示していたと説明した。

解説

訳の中心は「先生は〜と説明した」である。まず主節の explained を確定し、その内容として that 節を読み込む。その際、that 節内部の showed を主節の述語と混同しない。

who organized the outdoor lesson は先生を限定し、walking through the forest は生徒たちを限定している。二つの修飾先を取り違えると、英文に書かれていない人物関係や動作関係を作ってしまう。

「古い地図の上の印」を「古い地図の印」、「安全な道を示していた」を「安全な通り道を示していた」と言い換えても、対応関係が保たれていれば自然な訳として成立する。

重要なのは、主節の目的語となる大きな that 節を一まとまりとして扱い、その内部の小さな修飾関係まで正しく主節へ戻すことだ。

〈The teacher 〔who organized 〈the outdoor lesson〉〕〉 explained
S V
〈that 〈the marks 〔on 〈the old map〉〕〉 showed 〈safe paths 〔for 〈students
O
〔walking (through 〈the forest〉)〕〉〕〉〉.
O

S “The teacher who organized the outdoor lesson” / 主節 S / who 関係節を含む主語全体。関係節は teacher を限定する。
V “explained” / 主節 V / 主節の述語。説明した内容は後続の that 節で示される。
O “that the marks on the old map showed safe paths for students walking through the forest” / 主節 O・内容節 / explained の内容を表す that 名詞節全体。内部の showed は主節の述語ではない。

〈The teacher 〔who organized 〈the outdoor lesson〉〕〉 explained 〈that
S V O
〈the marks 〔on 〈the old map〉〕〉 showed
S V
〈safe paths 〔for 〈students 〔walking (through 〈the forest〉)〕〉〕〉〉.
O

S “who” / who 関係節 S / teacher を受ける関係代名詞。organized の主体。
V “organized” / who 関係節 V / 関係節内部の述語。主節 V の explained とは区別する。
O “the outdoor lesson” / who 関係節 O / organized の目的語。屋外授業を表す。
S “the marks on the old map” / that 内容節 S / 地図上の印。on the old map は marks を修飾する。
V “showed” / that 内容節 V / that 節内部の述語。印が安全な道を示していた。
O “safe paths for students walking through the forest” / that 内容節 O / showed の目的語。for students walking through the forest は paths の対象を表す形容詞句で、walking through the forest は students を修飾する。

〈The teacher 〔who organized 〈the outdoor lesson〉〕〉 explained 〈that 〈the marks
〔on 〈the old map〉〕〉 showed 〈safe paths 〔for 〈students 〔walking
V
(through 〈the forest〉)〕〉〕〉〉.
M

V “walking” / 分詞句 V / 準動詞の V。歩く主体は students であり、主節の定形 V ではない。
M “through the forest” / 分詞句 M・経路 / walking を修飾し、森を通るという経路を示す。

2

英文　After the evening practice ended, the players carrying heavy bags waited outside the school gym because the last bus had already left the nearby stop.

a（構造）

主節の骨格と指定範囲は次のとおりである。

- 主節 S：the players 〔carrying heavy bags〕
- 主節 V：waited
- 場所を表す M：(outside the school gym)
- 時間を表す副詞節：(After the evening practice ended)
- 理由を表す副詞節：(because the last bus had already left the nearby stop)

carrying で始まる分詞句の範囲は carrying heavy bags である。

After 節の内部では the evening practice が S、ended が V となる。

because 節の内部では the last bus が S、had already left が V、the nearby stop が O となる。had left は過去完了の述語を構成するまとまりである。

主節の waited と、従属節内部の ended・had left を別々の述語として捉える。

また、carrying heavy bags は players を説明する分詞句であり、主節の新しい述語ではない。

b（関係）

because the last bus had already left the nearby stop は、主節の players waited に対して理由を表す副詞節である。because は理由を導く接続詞であり、「最終バスが近くの停留所をすでに出てしまっていた」という内容が、選手たちが体育館の外で待っていた理由として示されている。

したがって、because 節を単なる時間情報として並べるのではなく、主節との理由の関係を訳に反映する。

c（全訳）

直訳： 夕方の練習が終わったあと、重いかばんを運んでいる選手たちは、最終バスが近くの停留所をすでに出ていたため、学校の体育館の外で待った。

満点の訳： 夕方の練習後、重い荷物を持った選手たちは、最終バスが近くの停留所をすでに出発していたため、学校の体育館の外で待っていた。

解説

この文の中心は、the players waited である。

文頭の After 節は、練習が終わったあとに主節の出来事が起こったという時間関係を示している。一方、because 節は、なぜ選手たちが待っていたのかという理由を加えている。二つの副詞節は同じ主節を説明しているが、その意味関係は異なる。

また、had already left は、主節の waited よりも前に最終バスが出発していたことを表す。「すでに出発していた」と訳すことで、過去の出来事同士の前後関係が明確になる。

日本語では「練習後」を文頭に置き、「最終バスが出発していたため」を主節の直前に置くと読みやすい。ただし、英文に書かれていない迎えの人や、その後の行動まで付け加えてはいけない。

©ミライコーチング

(After 〈the evening practice〉 ended) , 〈the players 〔carrying 〈heavy bags〉〕〉
M S
waited (outside 〈the school gym〉)
V M
(because 〈the last bus〉 had already left 〈the nearby stop〉) .
M

M “After the evening practice ended” / 主節 M・時間 / After 節。夕方の練習が終わったあとに主節の出来事が起こる。
S “the players carrying heavy bags” / 主節 S / carrying heavy bags が players を修飾する。荷物を運ぶ主体は players。
V “waited” / 主節 V / 主節の述語。選手たちが待っていたことを表す。
M “outside the school gym” / 主節 M・場所 / waited の場所。学校の体育館の外を示す。
M “because the last bus had already left the nearby stop” / 主節 M・理由 / because 節。最終バスがすでに停留所を出ていたことが待機の理由。出発は待機より前。

(After 〈the evening practice〉 ended) , 〈the players 〔carrying 〈heavy bags〉〕〉 waited
S V V O
(outside 〈the school gym〉) (because 〈the last bus〉 had already left
S V
〈the nearby stop〉) .
O

S “the evening practice” / After 節 S / 終了した主体である夕方の練習。
V “ended” / After 節 V / After 節内部の述語。練習終了は主節の待機より前。
V “carrying” / 分詞句 V / 準動詞の V。荷物を運ぶ主体は players であり、主節の定形 V ではない。
O “heavy bags” / 分詞句 O / carrying の目的語。運んでいる重い荷物。
S “the last bus” / because 節 S / 出発した主体である最終バス。
V “had already left” / because 節 V / 過去完了の述語全体。核は had left で、already は副詞。出発は主節の waited より前。
O “the nearby stop” / because 節 O / left の目的語。最終バスが出発した近くの停留所。

3

英文

Although the new study room is much larger than the old one, it still does not have enough desks for every student in the evening class.

a（構造）

主節の S は it であり、直前の the new study room を指す。主節の V は does not have である。does は否定文を作るための助動詞であり、have が「持っている」という中心の意味を担う。主節の O は enough desks for every student in the evening class である。

Although で始まる副詞節の範囲は、Although the new study room is much larger than the old one までである。

構造を整理すると、次のようになる。

- 譲歩を表す M：(Although the new study room is 〔much larger than the old one〕)
- 主節 S：it
- 主節 V：does not have
- 主節 O：enough desks for every student in the evening class
- 主節の否定内容を補足する語：still

Although 節の内部では the new study room が S、is が V、much larger than the old one が C となる。much larger than the old one は、larger を中心とする形容詞のまとまりであり、新しい学習室の大きさを説明する。

比較対象は the new study room と the old one であり、比較している性質は部屋の大きさである。much はその程度差を強めている。

b（関係）

does not have enough desks for every student は、「すべての生徒に行き渡るだけの机がない」という数量・充足の関係を表す。enough desks は「十分な数の机」、for every student は「すべての生徒に対して」という範囲を示している。否定されているのは、全員に対して机の数が十分であるという状態だ。

したがって、全員に机が行き渡らないと述べているのであり、机が 0 台なのか、何台かあるのかまでは断定できない。また、机が不足していることと、部屋が古い部屋より広いことは矛盾しない。

c（全訳）

直訳： 新しい学習室は古いものよりずっと大きいけれども、それでもその学習室は夜間クラスのすべての生徒のための十分な数の机を持っていない。

満点の訳： 新しい学習室は古い学習室よりかなり広いが、それでも夜間クラスの生徒全員が使えるだけの机はない。

解説

この英文では、Although 節が比較の情報を示し、主節が机の数について述べている。比較の内容は「新しい学習室のほうがかなり広い」というものであり、主節の否定は「生徒全員に十分な机があるわけではない」という内容である。

日本語を自然にするとき、「それでも」を入れることで、Although と still が作る譲歩・対比の関係を表しやすくなる。

一方、「新しい学習室は広くない」と訳すと比較の内容が反転する。「机が全くない」と訳すと、原文では確定していない机の台数を決めてしまう。

比較対象、程度差、否定される数量関係をそれぞれ保持してから日本語を整えることが、正確な全文解釈につながる。

(Although 〈the new study room〉 is 〔much larger (than 〈the old one〉)〕) [M], it [S] still [M]

does not have [V] 〈enough desks 〔for 〈every student 〔in 〈the evening class〉〕〉〕〉 [O].

M “Although the new study room is much larger than the old one” / 主節 M・譲歩 / Although 節。新しい学習室が古い学習室よりずっと広いという肯定の比較を表す。
S “it” / 主節 S / the new study room を指す代名詞。
M “still” / 主節 M・対比 / still は「それでも」。Although 節との対比を補う。
V “does not have” / 主節 V・否定 / 否定を含む述語全体。全員分の机が十分にある状態を否定し、比較の肯定内容は否定しない。
O “enough desks for every student in the evening class” / 主節 O / 全員に行き渡るだけの机。数が不足しているが、0 台か何台かあるかは断定できない。

(Although 〈the new study room〉 is 〔much larger (than 〈the old one〉)〕, it still does
S V C
not have 〈enough desks 〔for 〈every student 〔in 〈the evening class〉〕〉〕〉.

S “the new study room” / Although 節 S / 比較される主体。新しい学習室を表す。
V “is” / Although 節 V / 主語と比較を表す補語を結ぶ述語。
C “much larger than the old one” / Although 節 C・比較 / 新しい学習室の広さを説明する形容詞句。the old one が比較対象で、much は大きさの差を強める。主節の否定はこの比較にかからない。

4

英文

If the town offered free music lessons on weekends, children who cannot afford private classes would have a chance to learn an instrument with their friends.

a（構造）

主節の骨格は、次のとおりである。

- 主節 S：children 〔who cannot afford private classes〕
- 主節 V：would have
- 主節 O：a chance 〔to learn an instrument with their friends〕
- 条件を表す M：(If the town offered free music lessons on weekends)

指定された句・節の範囲は次のとおりである。

- If で始まる副詞節：If the town offered free music lessons on weekends
- who で始まる関係節：who cannot afford private classes
- to learn で始まる不定詞句：to learn an instrument with their friends

If 節の内部では the town が S、offered が V、free music lessons が O となる。(on weekends)は提供する時を示す副詞句である。

who で始まる関係節は、主節 S である children を限定している。内部では who が S、cannot afford が V、private classes が O となる。

また、to learn an instrument with their friends は chance を後ろから説明する形容詞用法の不定詞句である。「何をする機会なのか」という内容を示しており、with their friends は learn の状況を補足している。

b（関係）

問題の場面では、町は現在、週末の無料音楽レッスンを実施していない。この状況と、If 節の offered と主節の would have の対応を合わせて判断すると、現実とは異なる現在の仮定を表す仮定法過去として読める。If the town offered は「もし町が提供しているとしたら」という仮定を表し、would have は、その仮定が成り立つ場合の結果を表している。

ここでの offered は、過去に提供した事実を報告するための過去形ではない。would have との対応に加え、問題に示された現在の状況が、現実とは異なる仮定であることを判断する根拠となる。そのため、町が過去に無料レッスンを実施したと断定して訳してはいけない。

c（全訳）　直訳： もし町が週末に無料の音楽レッスンを提供しているとしたら、民間のレッスンの費用を払う余裕がない子どもたちは、友人たちと一緒に楽器を学ぶ機会を持てるだろうに。

満点の訳： 町が週末に無料の音楽レッスンを開いていれば、民間のレッスンを受ける経済的余裕のない子どもたちは、友達と一緒に楽器を学ぶ機会を得られるだろうに。

©ミライコーチング

解説

この文で主に述べられているのは、「子どもたちが楽器を学ぶ機会を得られるだろう」という仮定の結果である。If 節が条件を示し、who 節が対象となる子どもたちを限定し、to 不定詞句がどのような機会なのかを説明している。

主節の would have を普通の過去の出来事として訳すと、仮定の意味が失われる。反対に、現実に無料レッスンが開かれ、子どもたちが実際に楽器を学んだと断定するのも適切ではない。

自然な日本語では「機会を持つ」を「機会を得る」としてよい。また、「提供しているとしたら」を「開いていれば」と整えることもできる。ただし、仮定の条件、子どもたちの限定、楽器を学ぶ機会という内容、実現を仮定した結果という関係は変えない。

一文の中に条件節・関係節・不定詞句が同居していても、主節の骨格を先に確定し、それぞれのまとまりを正しい位置へ戻せば、文全体の意味を過不足なく組み立てることができる。

(If 〈the town〉 offered 〈free music lessons〉 (on weekends)) ,
M

〈children 〔who cannot afford 〈private classes〉〕〉 would have
S V

〈a chance 〔to learn 〈an instrument〉 (with 〈their friends〉)〕〉.
O

M “If the town offered free music lessons on weekends” / 主節 M・仮定条件 / If 節。町が現在週末の無料音楽レッスンを実施していないという場面と動詞の形を合わせ、現在の事実と異なる仮定として読む。
S “children who cannot afford private classes” / 主節 S / who 関係節を含む主語全体。民間のレッスンの費用を負担できない子どもたちを表し、1 対 1 の授業には限定しない。
V “would have” / 主節 V・仮定の結果 / would と所有を表す have からなる述語。完了形ではない。If 節の仮定が成り立つ場合の結果を表す。
O “a chance to learn an instrument with their friends” / 主節 O / 得られる機会の内容。to learn 以下は chance を修飾し、with their friends は楽器を学ぶ際の同行を表す。

(If 〈the town〉 offered 〈free music lessons〉 (on weekends)) , 〈children 〔who
S V O M S

cannot afford 〈private classes〉〕〉 would have 〈a chance 〔to learn 〈an instrument〉
V O V O

(with 〈their friends〉)〕〉.
M

S “the town” / If 節 S / 無料音楽レッスンを提供する主体である町。
V “offered” / If 節 V / 条件節内部の述語。現在は実施していないという場面から、現在の事実と異なる仮定として読む。
O “free music lessons” / If 節 O / offered の目的語。無料の音楽レッスン。
M “on weekends” / If 節 M・時間 / offered の時を表す。週末に提供するという条件。
S “who” / who 関係節 S / children を受ける関係代名詞。afford の主体。
V “cannot afford” / who 関係節 V / 否定を含む述語全体。費用を負担する余裕がないことを表す。
O “private classes” / who 関係節 O / afford の目的語。民間のレッスンであり、1 対 1 には限定しない。
V “to learn” / 不定詞句 V / 準動詞の V。学ぶ主体は children であり、主節の定形 V ではない。
O “an instrument” / 不定詞句 O / learn の目的語。学ぶ対象である楽器。
M “with their friends” / 不定詞句 M・同行 / learn を修飾し、友人たちと一緒に学ぶことを表す。their は children に対応する。